

平成24年度 公益財団法人大阪市博物館協会の事業評価

大阪歴史博物館の運営状況（総括）【シート3】

事業区分	H23年度を中心とする指定管理期間の自己評価		外部評価 << 委員コメント総括 >>
	重点目標	詳細	
1 資料の収集、保存、活用	大阪の歴史・文化に関する資料の収集	大阪の絵師に関する資料の収集と展示を推進し、前年の特集展示の観覧者から、一鳳の作品に関する情報が多く寄せられ、今後の研究情報を蓄積した。展示公開を契機に新たな資料情報が集まり、大きな収穫を得た。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特別展を契機に大阪の歴史・文化に関する資料の収集に進展があったことを評価する。大阪歴史博物館が所蔵している資料の中で何が欠落しているのか、今後収集に力を入れるべきものは何かを明確にしなが、資料収集に努め、大阪の歴史・文化を発掘してほしい。</li> <li>・館蔵資料の概要と主要な館蔵品に関する情報をHP等で公開することが望まれる。資料目録等のデータベース化、データベースの公開等の状況を点検項目に入れて、不十分な点があれば、計画的に改善してほしい。</li> </ul>
	特別展を契機とする新資料の収集	特別展「心齋橋きものモダン」の開催を契機に商店の看板など、新資料を調査し、展示公開した。心齋橋の著名な商店(鬻付け油店)に関して、新出資料を確認し、大きな成果を得た。	
2 調査・研究	科学研究費による研究の推進	昨年度に続き、「基盤研究C」が2件、「若手研究B」が2件、計4件の研究が採択された。目標を達成した。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外部資金による研究が順調に採択されていることを高く評価する。調査・研究活動の概要がHPに掲載されていることも評価できる。</li> <li>・研究成果の公開状況(展示や調査研究報告書の作成・公開状況等)を整理してHPに掲載することが望まれる。</li> <li>・東京都江戸東京博物館との共同研究を継続することを期待する。大阪市を始め、大阪府・関西地区にある博物館、大学、研究所等との共同研究の一層の進展を期待する。</li> <li>・優れた調査研究成果をあげ、成果は講演会等を通じて広く公開されていることを評価する。講演会のテーマの多くは、大阪歴史博物館ならではのものが多い。特集展示のテーマとして順次取り上げていくことを期待する。</li> <li>・学芸員の情報(専門分野、研究業績、研究成果の公開状況)を積極的にHPで公表することが望まれる。大阪歴史博物館を“顔の見える博物館”にすることで、市民に大阪歴史博物館をより身近なものにすることが重要である。</li> </ul>
	他組織との共同研究の推進	江戸東京博物館と「都市比較史研究」をテーマに共同研究を実施し、当館学芸員の研究発表の内容を江戸東京博物館の『調査報告書第26集』に掲載した。目標に達する成果を得た。	
3 展示(常設展示、特別展)、来館者サービス	特集展示における外部との連携	特集展示「懐かしい市電とバスのある風景」では、大阪市交通局と、「新発見なにわの考古学2011」では貝ボタン製造会社と、「古文書からみる大坂の町」では大阪市立大学と連携した展示を開催した。「市電とバス」では、大阪市内の高齢者が前年比で2.4倍の増加となった。こうした効果はあったが、特集展示の広報なども含めて、いっそうの取り組みが必要。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大阪歴史博物館のリピーターを増やす上では、特集展示の一層の充実が有効であろう。これまでも様々な努力がなされ一定の成果をあげているが、改善の余地も見られる。展示テーマのコンセプトとターゲットを明確にし、外部との連携を更に進め、展示内容の充実を図り、市民に更にアピールできるものにするのが期待される。広報も、コピー、デザイン等の更なる工夫が必要である。</li> <li>・子ども向け事業が目標を達成したことを評価する。8階の考古の体験コーナーなど、子どもが楽しみながら学習できるスペースは通年で事業が行われていることを考慮すれば、館のHPに子ども向けのサイトを独立させるなどして、子ども向けの広報を充実することが重要である。</li> <li>・館の様々な努力により、入場者数が前年並みを維持できたとも言える。歴史系博物館には、来館者から「展示の更新がほとんどない」「一度見たから、再度訪問する必要はない」と思われている館が多い。新たな観客の開拓とリピーターの確保が必要である。リピーターを確保するためには、歴博の展示の内容、展示方法を全般的に点検・見直し、「いつ来ても何か新しい発見がある博物館」であることを目指してほしい。</li> <li>・常設展示については、期間限定で展示している資料がわかるようにしてほしい。また、常設展示の見所をもっとアピールしてほしい。“いつ来ても、どこかに変化があって、また来てみたい”と思ってもらえる、大阪歴史博物館ならではのオリジナリティのある展示空間の演出に一層努める必要がある。</li> <li>・特集展示は展示室のスペースの制約もあって、展示に苦労が多いと思う。考古関連企画は、大阪文化財研究所との連携事業でコンセプトが明確になっているが、歴史関連企画の一部には、インパクトが弱いものも見受けられる。観客にとってタイムリーなもの、新たな発見があるものを増やすことが重要である。特集展示を見るために来館したという観客が増えるように一層展示を充実することを要望する。</li> </ul>
	こども向け事業の充実	常設展示場内での子ども向け事業として「わくわく子ども教室」を実施し、和同開珎づくりでは155名、土人形づくりでは178名の参加を得た。また1階のオープンスペースでは、年間23回、手作りおもちゃ教室を開催し、延べ1,761名の参加を得た。ほぼ目標に達する成果を得た。	
	10周年記念事業での新たな来館者層の開拓	現代アートとのコラボ(「かえっこ」「聞き耳」)、グッズ製作・販売、記念の展示、新型チラシの配布などを試みた。観覧者数などは前年並み、ただし実験的な取り組みにより今後の活動に資する指針や様々なデータを得られた。数値的にはやや物足りないが、ほぼ目標に達した。	
4 教育普及、学習支援、友の会、ボランティア	学術研究の発信の拡大	難波宮大極殿発見50周年記念シンポジウム、天守閣・歴博周年記念シンポジウム「秀吉の大坂城と城下町」等、のべ8日の学術シンポジウムを開催し、約1,800名の参加者を得た。話題性のある研究内容を幅広く市民に発信し、しかも多くの参加者を得るなど、大きな成果を得た。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講演会やシンポジウムの充実には目を見張るものがあり、高く評価する。講演内容をもとにブックレット形式の書籍を出版することも考えられる。講演やシンポジウムの開催情報、過去の記録を、HPに整理して掲載すると、大阪歴史博物館の研究情報発信能力の高さを一層アピールできる。現行の「展示・イベント」は、お知らせ機能に重きが置かれ、データベース機能が弱い。お知らせとデータベース機能を分離し、それぞれの機能を充実することを要望する。</li> <li>・大阪城天守閣との連携・共同事業で大きな成果が上がったことを評価する。参加者数の多さは、学術情報の発信に対する関心の高さを示しており、今後も、学術情報の発信に取り組んでほしい。</li> <li>・近年、東京や大阪など大都市において、地域の歴史や文化に関心が高まりつつある。自分たちの歴史を自分たちで語り、ひいては地域から日本と世界の歴史を見直す性格をもつ、身近な歴史を再発見する事業の実施は意義がある。大阪歴史博物館でも、身近な歴史を再発見する事業、地域の文化資源を掘り起こす事業に力を入れていることを高く評価する。手間暇がかかる事業であると思うが、博物館の展示や事業の充実と結びつくように留意して定期的に開催することを期待する。</li> <li>・市民に「歴史と対話する」場と機会を提供する上では、ボランティアの方々による利用者への支援が重要である。館がボランティア研修に力を入れていることを評価する。ボランティア活動をしてくださる方々とは意思疎通を図り、ボランティアが活動しやすい環境をつくること、週末に活動できるメンバーが少ないことを解消するために、週末を中心に活動するボランティアを募集する等の措置を講じること、活動範囲を展示解説にも広げていくことを要望する。</li> </ul>
	身近な歴史を再発見する事業創出	継続中の「なにわ考古学散歩」に加え、見学会「大坂ぐるり町あるき」を新規に開催し、のべ8日、約300名の参加者を得た。参加者からは、身近な地域の歴史を理解できたと好評を得た。	
	ボランティア事業の推進	H23年度採用ボランティアの熟達化支援として、活動の充実と来館者対応の向上を目的に、年間10回の館内外でのボランティア研修を実施した。ボランティアの活動は年間延べ6,721人が活動し、概ね計画通りの活動を実施することができた。しかし、週末については、全体的な傾向として活動の参加者数が少数となり、その結果、直前になって活動中止となる場合も頻発し、今後の課題である。	

5 学校等との利用促進、学校教育支援	体験発掘事業の推進(各学校による申込)	大阪市内小学校の5・6年生を対象にして、11月8日～14日までの5日間で、7校(18クラス537名)の体験発掘事業を実施した。ほぼ目的通りの内容を実施できたが、他の館事業との関係で調査業務に専念することが難しく、発掘調査担当学芸員の選出にあたって調整すべきことが多く発生し、課題が残った。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事業が益々充実するためには、大阪文化財研究所の協力やボランティアによる支援を得ることが望まれる。</li> <li>・博物館で職業体験の機会を提供することは意義のあることである。館の社会貢献については、HPで積極的に紹介してほしい。</li> <li>・実習を受け入れた大学には館の応援団になってもらうことが重要である。また、大学を対象にしたキャンパスメンバーズ制度を普及させる上では、メンバー校を優先して実習を引き受けることも検討してほしい。</li> <li>・規模の小さい大学等がキャンパスメンバーズ制度に入会しやすいように工夫することが望まれる。多くの大学等に加入してもらうためには、大阪市博物館協会所属の博物館のうち特定の館だけを利用する制度も必要であろう。また、制度の周知を、博物館協会のHPだけではなく、各館のHPでも行ってほしい。</li> </ul>
	職業体験および職業講話支援	学校からの申し出にもとづき、11校114名の児童に対して職業体験・職業講話を実施した。ほぼ目的通りの内容を実施できた。	
	博物館実習生の受入	大学からの依頼にもとづき、博物館学芸員課程を履修する大学生を対象に、3期(各4日間、計12日間)で、11校 65名の実習生を受け入れた。ほぼ目的通りの内容を実施できた。	
6 広報・宣伝、情報公開と発信	親しみやすい情報発信の拡大	新たな試みとして、若年女性層向けのフリーペーパー「えんそくのしおり」を3号まで発行した。大阪市内のギャラリーやカフェなど新規店舗で配布した。「かわいい」目線に立った編集により、若い女性読者を獲得し、雑誌『日経トレンドィ』にも紹介されるなど、発行の狙いが的中し、目標を達成した。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・かわいいフリーペーパーの作成・配布を評価する。「えんそくのしおり」のコンテンツは、HPからダウンロードできるようにして一人でも多くの人が活用できるようにしてほしい。また、事業には継続性が必要なので、今後もしおりを発行してほしい。なお、館の広報物のデザイン・レイアウト等の改善に努めてほしい。</li> <li>・現代アートとのコラボ等新たな試みに挑戦していることを評価する。成果があがったものは、継続して実施してほしい。10階の展示室で実施した現代アートのコラボレーションは、今後も定期的実施することを期待する。</li> <li>・全国の歴史系博物館の中でも館内での外国人向けのサービスは充実している。一方、HPは多言語化はされてはいるが、常設展示を紹介している部分等には、外国人向けの情報が十分とは言えない状況が見られる。既に修了した特別展の情報は詳細なものが掲載されている。充実したサービスと改善が必要なものも併存している。不十分なものを速やかに改善することを期待する。</li> </ul>
	開館10周年の「感謝」と「模索」	「HAPPY 10th Anniversary企画」、「ワクワクレキハク!! 常設展示パワーアップ企画」として、常設展示無料入館日、オリジナルグッズ開発や、現代アートとのコラボレーション、新音声ガイド「聞き耳」などを実施した。無料開放3日間で約4,200名が来館、「かえっこ」イベントに約300名が参加するなど広く支持を集め、新たな実験的試みもできた。	
7 地域、市民、関連機関との連携・交流	地元NPOとの協働事業の充実	当館とその周辺を会場とした事業の展開による集客への取り組みとして、難波宮フェスタ2011、うえまちコンサートを定例化して開催した。事業は定着し、博物館の多様な魅力を市民に知ってもらい良い機会となっている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地元NPOとの協働事業が定着していることを評価する。</li> <li>・大阪の重要な知的基盤である大阪市立大学との連携事業を評価する。今後も継続・発展させることを期待する。</li> <li>・ともに歴史系博物館であり、近隣にある大阪城天守閣との連携には、今後も力を入れてほしい。</li> </ul>
	大学との連携事業の拡大	大阪市立大学と連携した「古文書講座」を共同企画し、市民向け講座として実施した。応募者が定員を大きく超え、参加者の反応も良好だった。	
	同一法人内での連携の拡大	大阪城天守館と連携し、双方の強みを活かした特別展「日欧のサムライたち」を企画・開催した。期間中、目標比で入館者数107.8%、有料収入171.0%を達した。	
8 施設の整備、維持管理、リスクマネジメント	展示光源の交換による展示資料劣化の軽減	特別展示室・常設展示室全室にLEDを導入し、光源の交換により紫外線の削減ができるようになり、資料劣化の軽減が期待できる展示環境となった。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・LEDの導入を評価する。博物館資料の保存に博物館が果たしている役割を市民に理解していただく上からも、市民に日常の資料保存のための努力を積極的に伝えてほしい。</li> <li>・電気、ガス使用量の削減に成功したことを評価する。</li> <li>・リスクマネジメントの確立に向けて着実に取り組んでいることを評価する。取組が形骸化しないように定期的に点検・見直しをしてほしい。</li> </ul>
	電気使用量の削減	①特別展示室・常設展示室全室にLEDを導入し、電気使用量を削減した。ほぼ目標に達した。②収蔵庫・常設展示室の温湿度管理の徹底により、前年度と比較して電気8%・ガス11%の削減を行った。目標を達成した。	
	防火防災等のリスクマネジメントの確立	博物館における様々なリスクに対応するためのマニュアル化を進め、作成した基本マニュアルに基づいて訓練を実施し、当初の目標をほぼ達成することができた。	
9 運営・マネージメント	事務体制の効率化	事務体制の見直しと、3課の分担事務の効率的再編成のため、企画広報係に事務担当の職員を配置し、総務課と企画広報課を中心に事務分担の再編成を行った。目標をほぼ達成できた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学芸系職員と事務系職員、館の職員と外部委託業者・館の支援者が十分連携して業務が遂行できるように、情報共有と研修に努めてほしい。業務内容や立場が異なるスタッフの連携がよいことは博物館にとって極めて重要である。</li> <li>・変化の激しい時代に博物館が設置されてから10年が経過した。今後の将来計画(今後の調査研究や展示の方向性、リニューアルの在り方、博物館の位置づけ等)について大阪市博物館協会と施設設置者(大阪市)で協議を開始してほしい。平成生まれが増えてくる今後、若い世代のコミュニティ・ミュージアムとして機能していく上で「大大阪」時代以降、戦後、とりわけ高度経済成長以降の展示を今後どうしていくのか、グローバル化が進展する中、変貌著しい大阪の姿をどう展示するかは大きな課題である。今後の展示の在り方と交流機能の強化について計画的に検討していくことを期待する。</li> <li>・大阪市博物館協会所管の館・研究所との連携効果を発揮した経費の節減方策(共同購入、共同契約等々)を更に実施し、経費の節減を図り、節減した予算の有効活用と効果的な予算執行に努めてほしい。予算の節減だけでは博物館の活力が損なわれる。節減だけではなく、博物館の活性化のため投資するところには投資してほしい。博物館スタッフが投資に見合う社会的価値を生み出していくことが今後の博物館戦略を考えていく上で重要である。</li> <li>・学習情報センターは、重要な機能を担う施設である。市民には無料で利用できる空間でもある。HPに掲載されてはいるが、見過ごしやすい。独立したサイトにする、調査研究のサイトにも掲載する等の工夫をして、センターの果たしている重要な機能をアピールしてほしい。</li> </ul>
	10周年の取組	プロジェクトチームをつくり、記念事業の企画・推進し、種々の10周年記念事業を実施し、その後検証もあわせて行った。初の試みとして、アートとのコラボ事業を実現できた。また関連グッズを開発する等、今後の事業のあり方に関して、手応えをつかむことができた。	
	管理経費の節減	節電対策として当初予定の展示ケース照明のLED化を実施するとともに、常設展示の定期メンテナンス時にも、展示ケース以外の展示照明についても、可能な範囲でLED球に入れ換えるなど、展示室照明のLED化を行い、節電対策を推進した。	
10 α ※各館の特性ができるように、この項目を活用する。	地域の博物館や文化資源を活用した「上町台地」の魅力発信による観光振興・地域活性化事業の推進	左記の事業名で文化庁の補助金事業に応募し、採択された補助金により、AR(拡張現実)技術によるスマホ、タブレット向けのアプリ「AR難波宮」を開発した。目標を達成した。新聞6件、TVニュース2件等で、スマホの新しい活用方法として話題を呼んだ。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上町台地の歴史は大阪を理解する上で鍵となる場所である。上町台地に係る、優れた企画を実施したこと、外部資金によって実現したことを高く評価する。利用実態や効果を十分フォローし、コンテンツのバージョンアップを適切に行ってほしい。</li> <li>・難波宮のサイト・ミュージアム機能を果たし、利用者のニーズに応えていることを評価する。</li> </ul>
	難波宮のサイト・ミュージアムとしての事業の推進	①ボランティア等による「難波宮遺跡探訪」を開催し、6回/日、のべ8,352人の参加を得た。②5世紀復元倉庫の公開を行い、毎日30分、のべ5,697人の参加を得た。③地下石組遺構の公開を行い、3回/年、のべ4日で290人の参加を得た。④エントランスでの市内発掘の速報写真展については、5回/年、配布資料計10,200部に達した。サイト・ミュージアムとしての役割を果たした。	